

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/index.jsp TEL:0798-54-6019

キリスト教と文化研究センター

最初の十年を振り返って

主任研究員 辻 学

(商学部助教授・宗教主事)



「聖典と今日の課題」プロジェクト主催
聖書学セミナー(2006年6月15日、16日)

この三月末で、キリスト教と文化研究センター(RCC)は、一九九七年四月の発足から十年を迎えます。

センターの名称は、キリスト教と現代社会の諸課題が触れ合う接点で生じる問題を研究するセンター(一九九七年度年次報告より)という理念を表したものです。最初のセンター長は、林忠良先生(当時経済学部教授・宗教主事。現任名誉教授)でした。RCCの十年を大きく分けると、前半は基礎固め、後半は発展の段階とすることができるようになります。前半の約五年は、R

CCが、それまで存在した「キリスト教主義教育研究室」とは異なる、キリスト教と現代社会の接点を問う研究センターとして学内で認知されるために大きな労力が割られました。また、

神学部教員と学部宗教主事とが協力して組織の責任を担いつつ、学内から研究員を広く募って研究活動を展開するスタイルを確立することもこの時期の課題でした。前半期の研究活動は、センター内での研究員による散発的な研究会を除けば、学外の著名人・研究者を主とする講師を招いての公開講演会(RCCフォーラム)に集中しています。

一九九七、九八年度は「生命倫理」、二〇〇〇、〇一年度は「民族と宗教」、二〇〇三、〇四年春は「エスニシティ・宗教・グローバルリズムを問う」という統一テーマを設定してRCCフォーラムを開催し、その成果を出版物として公開してきました。また、一

九九九年度、二〇〇三年度にMDS(複数分野専攻制)のプログラムを持ち、キリスト教科目を広範囲に提供したこともRCCの重要な活動です。

RCCの活動が大きく発展し始めたのは、プロジェクト単位で研究を進める体制をとるようになってからのことです。研究プロジェクトは、メンバーによる公開の研究発表会を中心に活動しています。こうしてRCCは、学外の著名人による講演会に依存する割合が高かった前半期の体質を脱却し、内部から発信する力を持つセンターへと成長しました。すでに二〇〇二年度に始まった「暴力とキリスト教」プロジェクトは、その成果を『暴力を考える キリスト教の視点から』(関学出版会、二〇〇五年)

として発表すると共に、総合コースとして授業提供しています。その後も「スピリチュアリティと宗教」「聖典と今日の課題」「聖

餐の理論と実践」といった研究プロジェクトが相次いで組織されてその成果が公刊されているものもあります(詳細はRCCのホームページを「閲覧下さい」)。

センター全体では、二〇〇四年秋から「キリスト教と平和戦略研究」を全体テーマとして設定し、RCCフォーラムを中心とする活動を継続しています。

RCCではこのテーマを、世界的にも例を見ない『キリスト教平和学事典』の出版へと結実させるべく、スタッフの総力を結集しています。「キリスト教と文化」の接点を研究することで関西学院大学の研究・教育に貢献しようとするRCCの理念をまさに具現化する、この事典の企画が成功しますよう、学内の皆様の広いご理解とご協力をお願いする次第です。



第三十三回RCCフォーラム講演抄（二〇〇六年十一月十六日）

ヘブライ語聖書は「平和」について何を語るか

RCC副長・関西学院大学神学部教授

水野隆一



はじめに「なぜ「聖書」か

キリスト教の視点から何かを論じる際、聖書は必ず参照されます。というのも、聖書はキリスト教の聖典であり、教義や倫理の典拠と考えられているからです。これをキリスト教では「正典」、つまり「物差し」、「規範」という言葉で表してきました。従って、キリスト教徒が「平和」や「人権」といった現代的な問題について考えるときにも、この書物の中に「答え」があると考へて、いつでもこの書物に何が書かれてあるかということを探ね求めてきました。

しかしながら、聖書は、地中海世界、オリエントの影響を受

けた古代の文書で、その社会体制や価値観を共有しています。従って、現代的な問題について「教え」を引き出すには「解釈」が必要となります。そして、今日のこの聖書をどのように解釈するかが緊急の課題となっていると思うのです。

そこで、今日は、ヘブライ語聖書が「平和」についてどのように語っているかを、実際に本文を見ながら、「一緒に考えてみたいと思います。」

「シャローム」について

ヘブライ語聖書で「平和」について語るとき、「シャローム」という語が使われています。この語はしばしば、「単に『戦争のない状態』を指すのではなく、『絶対的な平和』を意味する」と説明されてきました。

ヘブライ語聖書が「平和」について何を語っているかを考えるとき、この語の用法について詳しく見る必要があります。と

ころが、ヘブライ語聖書を読むと先に挙げたような一般的な説明に対して疑問が湧いてきます。つまり、この解釈は正しいのか。そして、正しいとすれば、「絶対的平和」とはどんなものか、という疑問です。

「シャローム」という語は、従来、「全体性」「欠けないこと」が本義であるとされてきました。そこから、「平和」「幸福」「健康」の意を持つようになったと説明されています。

一方、最新の研究では、この語の動詞としての側面に注目するようになっています。動詞として用いた場合、「ピエル語幹では「返却」「償還」「返礼」「報酬」を意味するので、こちらを本義であるとする説も有力になっています。つまり、報酬として支払われたものが十分な状態にあるというのが、この語（とその派生語）の意味するところだということです。「平和」についても、この点から考え直す必要があります。つまり、何かに対する、「返却」「償還」「返礼」「報酬」としての「平和」というわけです。

例えば、イザヤ書九章五節には、理想の王が「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」という称号で呼ばれています。この箇所の解釈は大変難しいのですが、「平和の君」という表現は、「統治者として正当な報酬を与える者」と考えると、よ

く理解できるのも確かです。

ヘブライ語聖書における「平和」の諸相

ヘブライ語聖書が「平和」について語るとき、大きく分けて次の三つの相があるように思われます。

- 一、軍事的勝利によってもたらされる「平和」
 - 二、倫理的にすぐれていること
 - 三、孤立・没交渉によって保たれる「平和」
- それらを語る箇所を具体的に見ていきたいと思います。

一、軍事的勝利によってもたらされる「平和」

ミカ書三章五節を見ると、「平和」は「戦争」の対語として用いられています。同じような例は列王記上二〇章一八節にも見ることが出来ます。

先程も少し見ましたイザヤ書九章一〜六節は、明らかに、軍事的勝利と「平和」を結びつけて語っています。

二節で「戦利品を分け合って楽しむ」といわれているように、ここには、戦争勝利の喜びがあらわされています。そして、戦争に勝利したことによって、新しい王が即位するのです。「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた」（五節）とい

う表現は、子どもの誕生というよりも、即位の表現と考える方がよいようです（詩編二編七節参照）。そして、戦争によって即位した王が理想的な治世を行う様が、「平和」や「正義」、「恵みの業」という語によって表現されています（六節）。

ヘブライ語聖書を記した人々イスラエルやユダといった国の人々は、エジプトとメソポタミア（アッシリア、新バビロニア）といった二つの超大国の軍事的脅威に常にさらされ続けたのです。このような超大国の属国となつて生き残ることに飽きたらず、政治的にも文化的にも独立を確保しようとするれば、侵入者に対する軍事的勝利を収める必要があります。侵略者によって荒らされることなく、自分たちの土地に「安住する」ことが、彼らの悲願であったといつてよいでしょう。しかし実際は、それも実現困難でした。イスラエルやユダが経済的な繁栄を享受できたのは、超大国の勢力が衰えたときか、超大国に従う政策を推し進めたときだけだったのです。そして最終的には、ユダは新バビロニアによって前五八六年に滅亡させられてしまいました。

ヘブライ語聖書では、そのような状況を宗教的に理づけようとしています。つまり、神ヤハウェに対する不信、不服従に對する「審判」として、戦争に巻



き込まれ、そして敗北するのだというのです。従って、「平和」のためには、ヤハウエが命じる「戒め」を守れというのが、ヘブライ語聖書、ことに申命記の歴史や預言者たちに共通する考え方です。ここには、先程述べたような、報酬としての「平和」というとらえ方が大きく反映されていると考えられます。

二、倫理的にすべれていること
 二、「平和」の第一の側面は、「戒め」を守ることとも深く関係しています。ヤハウエの戒めの「倫理性」ゆえに、それらを守ることで他の国や民に優越するという考え方が生まれてきます。「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠

実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる」（申命記二十八章一節）。申命記二十八章はさらに進んで、「戒め」の遵守によって、「祝福」を受け、守らない場合は、「疫病や飢饉」という災害に見舞われ、さらには外国との戦争に負け、捕虜となると警告しています（一五節以下）。

生存の保証として、倫理性が求められているとも言えます。イザヤ書四八章一七～一九節では「平和」と「正義」が並置され、それによって、生存が保証されるのみならず、繁栄も約束されると語られています。さらに進んで、すぐれた倫理性の故に他の国や民を従わせる、「精神的征服」が語られている箇所があります。ミカ書四章一～四節（「イザヤ書二章一～五節」）です。ここでは、ヤハウエの「教え」がシオン（＝エルサレム）から出、ヤハウエの「御言葉」によって諸国の民が感化されると記されています（二節）。その結果、戦争が終結し、「永遠の平和」がもたらされるということです（三節）。このような説明は、戦争の勝敗や繁栄の原因を倫理化しようとする試みであったと言えます。ところが、政治や軍事という現実の問題をあまりに精神化しすぎる危険性ははらんでいるのみならず、現実とのギャップも含

んでいると言えるでしょう。このような精神主義的な説明が何故行われたかという点、小国の自己肯定のために必要であったと言えます。つまり、軍事的、政治的な力で独立を勝ち取り得ない現実があったときに、別の自己肯定のための論理が必要とされたということでしょう。

三、孤立・没交渉によって保たれる「平和」

軍事的、精神的であれ「勝利主義」と呼べる考え方が、ヘブライ語聖書では「平和」と結びついている例が多くあるのですが、一方、周辺の国や民への関心をほとんど持たない「平和」のイメージもあります。

エゼキエル書は、世界を巻き込む最終戦争を描いている（三八～三九章）のですが、その後の世界にはイスラエルしか描かれませんが（四〇～四八章）。他の国や民に対する関心を失ってしまうのです。しかも、そこで描かれる見取り図、土地分配の地図や神殿の設計図は実現不可能なもので、エゼキエル書は、現実の社会における「平和」については何も語っていないのと同じとも言えます。

ヘブライ語聖書と「平和」

ヘブライ語聖書が「平和」をイメージする場合、現実的な生

活の実感に根ざしているということができません。自分の土地に住み、自分で働いた収穫によって生きる。そして、共同体があり、共同体内で支え合うというのが理想の生活であり、「平和」であると感じられていた。その意味で、わたしたちの実感からさほど遠くないと言えるでしょう。そして、このような「平和」な生活を脅かすものとして戦争をとらえていました。

自分たちの安定した生活が、侵略者によって脅かされるとき、ヘブライ語聖書では、勝利によって生活の保障を願っていました。しかし、ユダやイスラエルはほとんどの場合戦争に勝利できず、超大国の属国となることによつてのみ、生き残りが可能となっていました。そこから、敗戦の理由を精神化・倫理化して説明してきました。これもまた、極めて現実的な実感に基づいていると言えるでしょう。

このようにヘブライ語聖書を見てくると、わたしたちが現代の課題として考えるような「平和」のとらえ方は、ヘブライ語聖書には記されていないと言ってしまうのは、言い過ぎでしょうか。

ヘブライ語聖書の描く「平和」や「戦争」のイメージは生活の実感に根ざしており、時代を超えて共感できるものだと言えます。しかしそれだけに、現前の問題だけに對する対処となる危険性

があります。そして、自分たちが安全で「平和」でありさえすればそれでいいという願いを育て、そして、その「平和」を脅かす者は「実力」で排除してよいのだという論理を生む危険性をはらんでいます。

このような次元を超えて、共生を目指す「平和」は、ヘブライ語聖書の中には語られていないのでしょうか。私は、エレミヤ書二九章だけが、そのような新たな方向を指し示していると思っています。

わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。（エレミヤ書二九章七節）

自分たちを滅亡させ、「安住の地」から強制的に移住させた敵のために、その「平安」（「シヤローム」）のために祈れというこの呼びかけは、「報酬」としての「平和」や自分たちの安全としての「平和」から脱却して、新たな「平和」のあり方、「共に生きる」ことを求めるよう呼びかけています。そしてその呼びかけは、わたしたちにも向けられたものだと感じられるのです。（聖書の引用は『新共同訳』を使用しました。）

キャンパスの中のキリスト教シンボル(その9)

キリストのモノグラム

神学部専任講師 山田香里



(写真1)

最初期のキリスト教美術は、ローマのカタコンベに作られた墓穴をふさぐ板にハトや錨、魚

RCC研究プロジェクト
「聖餐の理論と実践」

研究代表者・社会学部助教授 打樋啓史

イエスが世を去った後、最初のキリスト者たちはイエスの記念の食事を定期的に行ない、そこでパンとぶどう酒をキリストの体と血を表すものとして受け、イエスが今も共にいるという希望を新たにした。この会食はやがて「聖餐」(ユーカーリスト)という儀式として食事から独立した形で発展し、教会のサクラメント(聖礼典/秘跡)となる。

以後今日に至るまで、聖餐はキリスト教という宗教を特徴づける儀礼として大きな意味を担ってきた。歴史の中で、聖餐の意味、特に「パンと杯」が「キリストの体と血」とどう関わるかについて様々な見解が示され、儀式的執行についても種々の形式が用いられ、それらの相違が教会の分裂の要因となることもあった。本来「一致の食卓」であるはずの聖餐が逆に不和を象徴する場となってきたのは皮肉なことだが、それは諸教会の教義的、信仰的、また時には政治的立場の全体が聖餐という儀式に凝縮された形で反映されてきたからである。ここからも、キリスト教を考え



(写真2)

リシア語でキリストと記したときの最初の二文字、X(キー)とP(ロー)が組み合わされています。コンスタンティヌス帝は三一三年にミラノ勅令を發布しキリスト教公認をしたことで有名な皇帝です。エウセビオスの「コンスタンティヌス大帝伝」によれば、皇帝は三一二年、宿敵マクセンティウスとの戦いを前に

る上で聖餐が極めて重大な要素であることが分かるだろう。

このプロジェクトでは、聖餐をキリスト教神学の一主題としてのみ扱うのではなく、文化、思想、社会、歴史との関わりから幅広く考察することを試みている。そもそも聖餐の問題は、食事儀礼や犠牲といった文化人類学のテーマ、そして象徴論や身体論などの哲学的主題と不可分の関係にある。またダ・ヴィンチの絵画「最後の晩餐」や映画「汚れなき悪戯」などに代表されるように、著名な芸術や文学において聖餐が主題としてま

たは表現の鍵として取り上げられることは少なくない。

これまでは各分野を専門とする研究分担者やゲストスピーカーが、「初期の聖餐における犠牲」、「パスカルの聖体論」、「聖餐とインカルチュレーション」などの主題で発表を行ってきた。二〇〇七年度には、スイスの教会における聖餐の試み、日本文化と聖餐、諸宗教・諸民族の食事儀礼と聖餐、芸術作品における聖餐などのテーマが取り上げられる予定である。研究会はどなたでも参加できる開かれたものである。キリスト教内部の「閉ざされた」テーマというイメージとは程遠く、「キリスト教と文化」をつなぐ広がりや深みもテーマを扱うこの研究会にぜひ多くの方に参加していただきたい。

編集後記

会堂の装飾にも早いうちから用いられ、特に、五世紀のナポリの洗礼堂の天井モザイク壁画では星の輝く天空に現れます。天井の四隅には、ヨハネの黙示録にも登場する四つの不思議な生き物(黙四・六)が描かれています。キリストのモノグラムはキリストそのものを表現しているものなので、ここでは終末のキリスト顕現を表現していることとなります。様々な場面で登場するキリストのモノグラム、ランパス礼拝堂の例を覚えて、他の教会堂やキリスト教美術の中にも探してみてください。

RCCは本年三月で一〇周年を迎えます。一頁を担当頂いた辻氏は発足時より主任研究員としてその発展に寄与して下さいました。四月より広島大学大学院教授として移籍される事が決まりました。これまでのRCCへのご貢献に対し、この場を借りて御礼を申し上げます。また、二頁三頁には水野RCCセンター副長のフォーラム抄を掲載、四頁ではこの四月に神学部就任され、キリスト教美術がご専門の山田専任講師と、研究プロジェクトの紹介を打樋社会学部助教授に担当して頂きました。RCCより大きな発信が行われている証としてお読み頂ければ幸いです。

RCC主任研究員・経済学部助教授

舟木 讓